

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年3月 No.89

胎児を守る運動

命について考える

「私は弟の番人でしょうか」

(創世の書) 4・9

ヨハネパウロ二世は演説や書簡の中で人間の尊さを絶えず強調している。「人権」について法王はこう表現する。「人格の諸権利が不可侵であると莊嚴に宣言され、いのちの価値が不可侵であると公式に確認されている、まさにそうした時代にあつて、とくにいのちが重要な意味を持つ誕生の時と死の時において、いのちの権利そのものが否定され、踏みにじられるのである。(いのちの福音 No.18)理由のひとつに、人類はみな兄妹だという考え方ができなくなった社会風潮が挙げられる。優劣や強弱を決めたがり、弱者が差別・中絶・安楽死などの標的にされてしまう。だが、命という賜物を神に感謝し生きる人ならば、喜んで実践出来る良い対策がある。それは他人への愛の実践だ。法王の言葉を借りて説明すると「愛の奉仕に携わるにあたり、わたしたちは一つの明確な態度に鼓舞され特徴づけられなければならない。すなわち、他人を世話する場合は、神がわたしたちに責任をゆだねた一人人と

して世話しなければならぬのです。イエスの弟子として、わたしたちはだれに対しても隣人となるように(ルカによる福音書10:29-37参照)、またきわめて貧しく、孤独であり、困窮のうちにある人たちに特別な厚意を示すよう求められています。胎児や死を前にして苦しむ高齢者と同様、飢える人、渴く人、外国人、裸の人、病人、捕らわれ人を助けるたびに、わたしたちはイエスに仕える機会を手にするのです。主自らこう語りました。【わたしの兄弟であるこれらのもつとも小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである】(マタイによる福音書25:40)

いのちがあるところでは、愛の奉仕は徹して首尾一貫したものでなければなりません。愛の奉仕は、偏見や差別を許容することはできません。それは、人間のいのちはどのような段階にあり、またいかなる境遇にあるうとも、神聖で不可侵だからです。人間のいのちは分割できない善なのです。(いのちの福音 No.87)」

【生きる権利】を支持する我々はこれらの言葉を日常生活の中で実践していかねばならない。罪なき命が奪われていくのに反対するたび愛の奉仕の一步となり、「個人の選ぶ権利を尊重」など反対思想の言葉を受け入れるのは胎児への差別となり、隣り人との結束をも失つてしまう。胎児はこの世で最も小さな弟や妹であり、もつれつきとした人間なのだとして伝えるべきだ。

これまでの話を要約すると、生命は不可侵の権利であり、受胎の瞬間から始まっている。尊い命は受胎の時から完全な形で存在する。この言葉を肝に銘じ、日々の言動の道しるべとし、紀元二千年の大聖年に向かってプロライフ活動を進める上での礎としよう。

我々が話す言葉や書く文章や行動はすべて弱い者を護る愛の奉仕につながる。子どもを大切にしながら年齢をいたわり病人や死期が迫つた人に手を貸す社会を築くため、我々の行為でカインが神に尋ねたあの質問への答えを示す必要がある。「私は弟の番人でしょうか」我々は常に声を大にして「そうです」と答えたい。

ジュディ・ブライソン

レイチエル

私は赤ん坊を亡くしました。妊娠五ヶ月の時に、胎児の心音が聞こえなくなったことを担当医から告げられました。医師によると、「不覚（自然）流産」が起こり、子宮内で胎児が死亡しているにも関わらず、その体は子宮内にとどまっている状態だったのです。私は、人工出産が自発的に胎児が下りてくるのを待つか、決めなければなりません。私は待つ方を選びました。

私が赤ん坊の死を知ったのは、一九九五年四月十九日、水曜日でした。しかも、オクラホマ・シティで罪のない子ども達が爆弾で大量虐殺されたわずか数時間後でした。私は、オクラホマにいる爆発の犠牲となった子ども達の親達と同じ想いを感じていました。私達はみんな同じ日に子どもの死を知らされたのです。その次の週の火曜日に、陣痛が始まりました。入院しましたが、陣痛はその二、三時間後には止まりました。レイチエル・エイリエラ・ペーナーは、四月二十七日、死産しました。レイチエルを毛布にくるんで抱きながら、その小さな手足も耳も鼻も、何もかもが完全に生成されているのに驚きました。レイチエルは、もはや超音波の画面に映し出されたほやけた映像

ではありませんでした。やっとこの子を手に入れたのだ。この手に抱き、名前をつけ、写真を撮って、いつでも思い出すことが出来る。そんな思いでいっぱいでした。この子は確かに存在し、愛らしく、かけがえない娘、レイチエルでした。

レイチエルの経験により、私は中絶についていくつか深く考えるようになりまし。十五年前、私は中絶していたのです。その後、中絶賛成運動に加わるようになりまし。しかし、その四年後に息子を妊娠した時には、プロ・ライフ活動をしようになりまし。妊娠中に超音波画面で息子を見て、その心音を聴かせてもらったおかげで、私は胎児が人間であることを理解することが出来ました。すると、かつて中絶した子どものことを強く後悔するようになりまし。それ以来、最初の子どもの死を殺し、その上名前も与えず、埋葬すらしなかつた自分に対して怒りを感じ続けてきました。その子はただゴミ同様に捨てられたのですから。私は最初の子どものしてやれなかつたこと、名前や埋葬やそのほかこれこそ子どもにしてやることだと思えることすべてをレイチエルにしてあげようと誓いました。そしてレ

イチエルが私にとってすべてであるようにしてあげようと。名も無く、顔も覚えられず、ごみくずのように焼却されるような目にはレイチエルを合わすまいと思いました。

レイチエルを抱きながら、私はレイチエルよりも妊娠週期の長い胎児が中絶されるケースも少なくないことに気がつきまし。レイチエルが正統な扱いと埋葬を受けられたのも、私がそう「望んだ」からにはかならないことに思い当り、私は身震いしまし。レイチエルが私の胎内から出る方法に人工流産を選んでいたら、レイチエルは私の腕に抱かれるかわりに焼却炉に投げ入れられていたでしょう。私は皮肉をこめて自分自身に問いかけまし。「望まれるって素敵ね」

病院のスタッフはとても親切で、レイチエルの写真を撮り、足型やピンクのリボン、病院が赤ん坊につける腕輪、名前と体重と身長を書いたプレートなどあらゆる記念となる品々をくれました。彼らは、死産した母親がこういうものをとても欲しいのを承知しているようでした。死産の場合は、これら以外に赤ん坊の想い出となるものがないからです。しかしここでまた、これも私がレイチエルを産むことを「望んだ」からなのだと思い、気が滅入りまし。

中絶を計画している女性に、私がレイチエルを抱いた時に目にしたものを見せてあげることができたらと思います。レイチエルの体

の各部がそんなにも早い時期にすでに完璧に生成されていたのを見てあげたい。まるでレイチエルが私にこう言ってるかのようにした。「私を見て。これでもちゃんとした赤ん坊じゃないって言える？あなたが目にしたものをみんなに教えてあげて！」レイチエルと同じような赤ん坊を「妊娠組織」だなんてどうして言うことができるんでしょう。神の名にかけて知りた。もしその人達が私が見たのと同じものを見ることができたら、同じことが言えるのかどうかを。

もう一つ気付いたことがあります。流産や死産で悲しんでいる女性がいたら、世間の人はその悲しみを想像できるのに、何故中絶をした女性も悲しんでいることに気がつかないのでしょうか。後で後悔するとも知らずに、深く考えないで中絶を選び、子どもを死にいたらしめたというだけで、彼女の失ったものなんの変わりがあるでしょう。流産や死産した女性には温かい手を差しのべるその世間が、中絶した女性には何の助けも与えず軽べつのまなざしで見ただけとは。逆に彼らは、中絶後に女性が経験する罪悪感や心の痛みは、プロ・ライフのせいだと、厚かましくも私達を非難しているのです。

レイチエルの埋葬を手配した時に、葬儀屋が言った言葉も、私にある考えを起こさせまし。私が葬儀の前日に娘を見たいと言った時、葬儀屋はちゅうちよしました。彼はこう言ったのです。「あまりいい

考えとも思いませんが。あんなに小さい胎児をもう一度わざわざ見ても仕方ないでしょう。もしもう少し大きいとか、臨月で死産した赤ん坊ならわかりますがね。」私はもう少して彼の気に入るような懐胎期に死んだ赤ん坊じゃなくて申し訳ないと謝りそうになつたほどでした。

私は、「誰も人間なのだ。たとえどんなに小さくとも」というプロ・ライフのスローガンを思い出しました。世間の人は、子どもを失った悲しみはその子どものおおきさに比例すると思っているようです。プロ・ライフの人は、とりわけこの類のことに怒りをおぼえます。なぜならこの考えこそが、そもそも中絶が認容されるようになった原因だからです。何故、人は妊娠初期の中絶より後期中絶のほうが罪深いなどと思う傾向があるのでしょうか。同じ行動をしても、時によって罪が重かつたり軽かつたりするものでしょうか。私達プロ・ライフとしては、自分達の信じていることを実行しなければならぬと思っています。胎児が受精の結果であることを真に信するならば、懐胎月齢や死亡原因に関わらず、すべての死亡した赤ちゃんに少なくとも埋葬するくらいの礼儀を払うべきだと思います。

私は神にどうしてレイチエルを連れ去ってしまったのですかと問いかけまし。慈悲深い神は、レイチエルが死んだわずか一週間後に、その問いにお答え下さいまし。

病院で祈りを捧げながら、私はもう限界ですと心の中で叫びました。罪もない子ども達をオクラホマの爆弾事件で無差別に殺されるままにしたり、祈るほど望んでいた子どもが胎内で死ななければならなかったり、もうこれ以上神を信じることはできませんでした。残酷すぎます。こんなことをお許しになる神を受け入れることはできないと思いましたが。堪忍袋の緒がきれたとはこのことでした。私は病院で神の導きを待ちました。その頃私は、産まれてくる子どもは死んでいることを十分知りながら、それでも陣痛と出産をすべて経験しようとしていました。

レイチエルを出産して一週間後の五月三日に私は家に戻りました。すると「静かな小さい声」が、私が道端カウンセリングをしていた中絶クリニックに行くよう話しかけてきました。その誘いに乗るまいとしていたのですが、その声は徐々に大きくなっていくようでした。

三十分後、妊娠危機センターのカウンセラーが私に電話してきました。彼女は、私達が中絶クリニックで配っていたパンフレットの後にあった番号をみて、私にかけてきたのです。今、彼女のもとにおびえた女の子がいて、その子に中絶クリニックでそのパンフレットを渡したプロ・ライフの人が連れてきたようでした。カウンセラーは、その女の子の話をしてもらえないかと言いました。私は、レイチエルが死んだばかりで、中絶について

話す気分にはとてもなれないと言おうとしました。しかし、電話口には、すでに女の子がかわって出ていました。

私が中絶についていつも話す言葉がこのとき何故か思い出せませんでした。私は、レイチエルのこと以外話す気にならないことに気がつきました。そんなわけで、私はその若い女の子に私の死産について話し始めました。神に一生懸命お祈りして授かったのに死んでしまったこと。赤ん坊を抱いてその小つちやな手足に驚き、キスし、名前をつけ、埋葬したこと。女の子は涙ながらに言いました。「お子さんをそんなに愛してらしたのに亡くされた人がいるのに、私なんか中絶を考えたということだけでもどんなにひどい女か？」カウンセラーが再び出て、何を言っただかさったか知らないけど感謝しますと言いました。電話を切った後、レイチエルの死が他の赤ん坊の命を救ったのだと気付き、啞然とする思いでした。しかし、神が私にお与えになった役目は、まだ終わってなかったのです。

次の朝、あの「静かな小さい声」で誰かがまた、私に中絶クリニックへ行くように言うのです。私は怖くてとても行けないと思いましたが、レイチエルの死がまだまだ生々しかったからです。レイチエルと同じくらいの子どもを中絶しに行く女性達を見るにしのびません。レイチエルの死でこんなにショックを受けている時だったか

ら、なおさらでした。胎児の命を安っぽいもののように考えている女性には会いたくありません。ただその時機ではない。レイチエルをこの手に抱いたその後では。しかし、その声はしつこく繰り返します。「行くのです。」

私は、十五年前私自身が最初の子どもを中絶したその中絶クリニックへ行きました。プロ・ライフの人はまだだれも来ていません。私は自分の正気を疑いました。すると、あの声が二ブロックほど向こうにある教会に行くよう言いました。言われたとおりその教会に行くのと、プロ・ライフの一人が教会の階段に座って、ホームレスに食事を与えていました。彼は、中絶クリニックにお祈りをしに行く用意はできていると言ひ、ほかの人達はそこに来るだろうと言いました。彼と一緒に戻ると、ほかのみんなが集まっていました。彼がみんなと口ザリオを唱えている間、私はかたわらで自分自身の思いと祈りに集中していました。私はふと持つてくる気になったレイチエルの写真を取り出して見ました。それから今度はクリニックを見ました。すると、おかしなことに、私は突然安らぎを感じはじめたのです。わけがわかりませんでした。私の最初の子どもはここで死んだというのに。

しかし、そつやって立つたまま、レイチエルに名前をつけたり埋葬したりすることでどんなにか慰められたか考えているうちに、つい

に分かりました。十五年もたつてからやっと、中絶した子どもに名前をつける気になれたのです。中絶後の十一年間というもの、私は中絶に対して強い拒否反応を示していました。その頃、自分の犯したことのおそろしさにショックを受けて、中絶後のカウンセリングに行つたことがあります。でも、途中で通うのをやめたのです。カウンセラーが悩みから解放されるには、中絶した子どもに名前をつけなさいと言いはつたからです。

そんなことはとてもできないと思ひました。名前をつけることでその子をより近くに感じて、苦しみが深くなるだけだと思つたのです。しかし、神は、レイチエルの死と私が彼女の名前をつけたことを利用したのです。私が最初の子どもに名前をつけることが出来るのだと気づく場所へ導き、苦しみから解放されるようにして下さったのです。私をわざわざ最初の子どもが死んだ場所へ連れていったのには、そういうわけがあつたのです。

そうしてクリニックの前に立つたまま、私は最初の子どもに名前をつけました。最初の子どもは男の子だったとずっと信じていたので「エイリエル」と名づけました。レイチエルのミドル・ネームの男性用の名前です。ミドル・ネームとしては、ヘブライ語で「慰める者」という意味の「ナチマン」を選びました。今や、エイリエルによって私の心は慰められ、自分が死んだ時、

彼に会うのが怖いとは思わなくなりました。長い間苦しみから解放されたいと思つていましたが、今、苦しみから解放されつつあることがわかり始めました。

ユダヤとカトリックの言い伝えでは、四人の天使がいます。ミカエル、ガブリエル、ラファエル、そしてウリエル（別名エイリエル）です。私は亡くした二人の子どもに神の使いの名前をつけていたので、もつとも私自身は友人に指摘されるまで気づきませんでした。

家に帰る前、エイリエルが本当に死んだ場所に行つてみたくなりました。中絶した時は、クリニックは今場所から二ブロックほど離れたところにあつたのです。そこまで歩いて行くと、ここが彼の墓だと感じた場所で、数日前家族の墓地にあるレイチエルのお墓の前にいた時と同じように立ちながら、私はエイリエルに心の中で話かけました。私はエイリエルに妹のレイチエルを可愛がつてあげてねと言つと、完全な平和で満たされた心でその場を立ち去りました。

私には彼らのほかにも二人生きている子どもがいますが、レイチエルとエイリエルのことは決して忘れません。レイチエルの短かった一生と悲劇的な死が、あり得ないと思つていた方法で私の心を動かし、解放してくれました。私には小さな二人の天使がいて、天国で神に可愛がつてもらっています。いつか再び、二人に会うことが出来るでしょう。

中絶、奴隷制、そしてホロコースト

「中絶は奴隷制度に似ている」

中絶の前提となるものは、奴隷制度の前提と同じである。アメリカでは、ある種類の人間は下等であるという考えを終わらせる為に戦争があった。確かに戦争の始めの頃は州の権利が問題であったが、その裏には奴隷問題があったのである。戦争前には奴隷制度を廃止するなど不可能に見えたが、終わってみるとそれは必然の事だった。一八六二年からリンカーン大統領は、兵役の被選抜者や死傷者の親に、何故彼等の犠牲が必要だったかを説明するのに、奴隷問題を引き出している。最終的に四年間の流血の末、奴隷制は終わった。この事から学んだものは何かないか、と願う所である。しかし現在は又元に戻ってしまっている。新たに「人間性」を問われている人間のグループがあるのだ。産まれる前の赤ちゃんである。米国憲法補則十四条では「公平な保護」を保証している。しかし誰の？まさにこの公平な保護というアイデアそのものが、

中絶を正当化する為にねじ曲げられているのだ。産まれる前の子どもは現実を無視し否定する空論家達は、妊娠した女性も、子どもの父親と同じ様に保護されるべきであると主張している。もし父親が妊娠という出来事から逃げる事が出来るのなら、母親も同じでなければならぬ。これは公平であり平等であり、米国憲法補則十四条が要求するものである、と。

「中絶は新しいホロコーストだ」

「ホロコースト」という言葉は、ナチスによる大虐殺を生き延びたユダヤ人達に使われている。自分達に何があったかを表すこの言葉がなくなると使われずこの言葉に、沢山のユダヤ人が懸念しているのがよくわかる。それでもなお、産まれる前の子どもは新たなホロコーストだ；この言葉は適している。

「ホロコースト」という言葉は特別な犠牲を表す専門用語だ。旧約聖書のレビ記には、罪の償いや捧げ物やホロコースト等、色んな犠牲が出てくる。ホロコーストとは火で丸焼きになる捧げ物の事である。

「ホロコースト」という言葉は、一九四五五年の原爆を表すのに長崎でも使われた。それは人々に何が起こったのかを理解させ、気を確かに持たせたのである。第二次世界大戦で使われた二つ目の原爆は、フランシスコ・ザビエルによって建てられた、長崎の小さなカトリックの教会に落とされた。それは何世紀にもわたる迫害を生き延びた教会だった。そのカトリック教会のリーダーである永井隆さんは、爆撃の後のミサでレビ記に出てくるその言葉を使った。それは当時議論を呼ぶ使い方があったが、人々に出来事を理解させるのに役立った。

長崎のカトリックの地域を狙ったのではないと言った；町の中は雲で隠れ見えなかったもので、町の見えた部分を爆撃したのだ。永井さんによれば、標的は神によって選ばれたのだ。しかし何故？彼が答えるには、戦争による両側の罪の為に、汚れなき子羊という大きな捧げ物の犠牲が必要だったのだ。迫害を逃れたカトリック教徒達が子羊になったのである。

ナガイさんの所見は論じる必要がある。たとえどんなに長崎の教会が賞賛すべきであったとしても、神の子羊となったのはその教会でなく、イエス・キリストなのである。しかし我々は自分達の苦しみをキリストの苦しみに結び付けるように、と言われている（ペテロの第一の手紙4章13節）。神は血みどろの犠牲は要求されない。しかし血みどろの世界が犠牲を要求し、イエス様がその犠牲者になられたのだ。

永井隆さんの影響もあって、長崎が持つ原爆の記憶は広島のとそれは大きく違う。広島はとても政治的；長崎はもっと精神的である。

今日、中絶反対者が我々の中での中絶の意味について理解しようとする時、そしてどのように対応するのがベストか考える時、広島と長崎は、流血について

別々の考え方を提示している。長崎の考え方に惹かれる人には、ナガイさんの言葉は重要だろう。「ホロコースト」という言い方をしたのである。

しかし今日の中絶とナチスのホロコーストにはいくつもの大切な類似点もある。両方とも想像を絶する大きな殺人だ。両方の殺人とも、優生学（よりよい人種を作り出す努力）から始まっている。もっとも大きい事は、両方が無関心な傍観者に黙認されている事かもしれない。

ナチスのホロコーストから学ぶものは、ユダヤ人とクリスチャンでは大きく違う。ユダヤ人にしてみると、「もう二度と」というと「自分達はもう二度とあんな風に殺されたりしない」というような意味になる。それがクリスチャンだと、「もう二度と」は「もう二度と我々の中にあのような悪が育つのを許さない」というような意味になるのである。ドイツは文化の進んだ教養のある、形式上はクリスチャンの国だった。ナチスのホロコーストは、ユダヤ人でなく、クリスチャンの人々に疑問を抱かせる。悪という物がいかに我々の作った文明の中で育ってしまったか、クリスチャンは理解しなければならぬ。ナチスのホロコーストが我々に教えてくれた事は単純な事だった：決して無実の者を殺すなかれ。

つまりクリスチャンにとって、中絶をホロコーストと呼ぶ事は、前回我々の不注意で起こったゆゆしき悪を思い出させるものだ。中絶もホロコーストも、優生学支持から生まれてきている。

現在の中絶賛成運動は「選択権」を強調しているが、元はと言えば、家族計画団体が長い間得ようと努力してきた、繁殖によってよりよい人種を作ろうという事なのである。「優れた者から」と、劣る者から少なく。

中絶はホロコーストと同じ規模である。実際、一世代で殺された数は、他のどんな危害よりも中絶によるものが多い。中絶の規模を他のどんな殺人と比べてみても比べようがない；他のすべてを足し合わせたよりひどいからである。

中絶を奴隷制度やホロコーストと比較するのは難しい問題である：もし中絶が奴隷制度と同じだったら同じ様な終わり方をするだろうか？もし中絶がホロコーストと同じだったら同じ様な終わり方をするだろうか？この質問には気を付けて答えなければならぬ。人間の歴史の中で例えば、インドや南アメリカ、フィリピンやポーランドの事を考えてみると、ゆゆしき悪は、戦争によって、あるいは非暴力運動によって終わっている。歴史は第三の選択肢を出していない。

チエザルも従うべき神の民としての政治責任を考える

旧約聖書における重要点のひとつに、神によって選ばれた民・イスラエル人と近隣国の人々との関係が挙げられる。神と聖約を交わしたイスラエル人にとって近隣国の偶像崇拜は許し難いことだった。

だが、他国の王制だけは是非とも真似したいと考え、預言者サムエルに「われわれを支配する王を立ててほしい」と言った。そこでサムエルが神に祈ると「彼らが何を言おうとその言うことを聞いてやれ。ただ彼らを治める王の権利とは何かをはっきり告げてやれ」と主は仰せられた。国家の平和は、王とその率いる民全員が「天の王」に従うか否かにかかっている。(サムエルの書上 八：1-22、十二：13-15参照)

主イエスマテオ福音書 十二：15-22と同じように言っている。チエザルに税金を納め立法や教育、献身なども大切だが、最終的には、歴史をたどるとすれば、二つの内一つが起こるのである：戦争になるか、非暴力運動を選ぶか。

ジョン・キャヴァナー・オーキーフ

てよいかどうかと聞かれ、イエスは言われた。「これはだれの像、だれの銘か」と。「チエザルのです」と答えると「それではチエザルのものはチエザルに、神のものは神に返せ」と。(マテオ福音書 二十一：21)

貨幣はチエザルの肖像が刻まれているのでチエザルのもの。人間には神の肖像が刻まれているので神のもの。何と明らかな論理か！ここで言う「神のもの」にはチエザル自身も含まれ、彼も神に従わねばならない。

サムエルの書上もマテオ福音書も、第二バチカン公会議における議題、政教分離は神と政治の分離ではないに通じる。政治を神から切り離したら、政府は混乱する。教会に政治的権力は無いものの、政治的責任はある。そもそも、皆が善く生きられるようにつくられた政府が、善を維持できない事のないよう、真理を伝えていく必要がある。真理は信仰上の宗派を超えた万物の基本である。真実こそが政策を形成せねばならない。

国民はもろろん政府もまた、神に従う義務がある。また、天の

民である(フィリッピン人への手紙 三：20)からと言って、この世における戸籍を失うわけではない。むしろ天の神を信じれば信じるほど、この世への関心が減るどころか増していく。なぜなら現世における善は来世でも失われることなく伝えられ広がっていくのだから。生きていく間の行動が来世にもつながるからこそ、今を大切にすべきである。

カトリック信者は政治に積極的に参加し、投票し、候補者に注目し、我々の思想を伝え、官職者を選び、よりよい生き方のためを声大にして語る義務がある。米国公教がその事を美しく表現している。「カトリックの歴史において市民権は美德で政治への参加は義務である。我々は世間から速さがる宗派ではなく、世の中を良くしようとする信仰者の集まりである」と。教会に投票箱が置かれることはないが、我々が投票に行ったからといって、教会の一員をやめたことにはならない。我々が真理に基づいた政策を講じていないで、どうして真理を信じているなどといえ

るだろうか？

今こそ挑戦の時である。我々の信仰を単に個人的な行為にとどめてはならない。イエスは大勢の前で教え、大勢の前で十字架にかけられた。今、復活された主は、我々に彼の仕事をバトンタッチして、世界中の人々を弟子とするよう命じられた(マテオ福音書 二十八：18-20)。どうか、主も国家も損なわれることのないように。

フランク・パウオーン

うれしいしんばい

ちゃんと
ついてくるんだよ
まいごにならないように
ちゃんと
あるいてくるんだよ
おかあさんは
いつだって
しんばいしている
あなた
おなかのなかに
うまれたときから
おかあさんは
うれしいしんばいを
しているんだよ

双子の生き残り

「サラ・スミス」私は私の半分です。」

サラは次のように説明しました。「この夢の中で、私はこの本に暗く閉ざされた空間にいて、アンドリューと通じあっています。突然明るくなり、アンドリューの顔が見えます。彼は怯えているようです。私には何が起きているのかわかりませんが、彼がバラバラにされているようにみえます。私のまわりをこの明るい色を取り巻いていて、それから私は全く独りぼっちになり、信じられないくらい怯えているのです。私は次は自分の番だと知りながら、じつとそこで待っているのです。」

これはサラ・スミスがおよそこの2年間、毎夜くりかえし見てきた夢です。それは24年前に起こった潜在的なイメージだと彼女は思っています。というの、サラは、彼女の弟アンドリューの命を奪い、彼女だけを残して中絶された双子の生き残りだからです。「これまでの人生で私は虚しさを覚え、何かが欠けていると

セラールが母に私に真実を告げたほうがよいと助言してくれました。そして、聖書で約束されているように、真実によって私は自由になれたのです。」

サラは双子の間に存在する特別な絆を断たれるという苦しみを味わい続けていたのです。14歳になるまで彼女はそういう絆が存在していて、そしてそれが壊れてしまったことも何も知りませんでした。それがいったん彼女を苦しめてきたものの正体がわかるとすぐに癒されはじめたのです。

「私が助かり、アンドリューの命が奪われてしまったことを知ってから、私はすぐに、彼は死んでしまったのに、どうして私はまだ生きているのか、という罪の意識に苛まれました。私の家族や友人や敬虔なクリスチャンが、そんなふうにならないうけなさい、生き続けて天寿を全うすべきだ、と私を納得させてくれるには長い時間がかかりました。幸運にも神様のおかげで、今こうして、私は生きてるのです。」

サラの人生は、彼女が自分の家族を持ちたいと思えるほど正常なものに近づいていて、今は医者になるため一生懸命勉強しています。過去のことを簡単に忘れてしまったわけではありません。実際、彼女は自分に課し

た特別な使命のよりどころとして自分の過去を使っているのです。その使命とは子ども達を彼女が経験してきたような目に決して遭わせないために、あらゆる年令の、あらゆる国の女性達に中絶に関する事実を知らせる手助けをすることなのです。

「私のいちばん気がかりなことは、女性が(選択の自由)を行使して赤ん坊の命を摘み取るうとする時、そのことが同時に赤ん坊の生きる権利まで奪うことになると気づいていないということとです。中絶を選ぶ女性のほとんどが殺人者ではなく、むしろ彼女たちは自分たちがしていることの恐ろしさに気づいていないだけなのだ、私は確信しています。」

サラは幸運でした。生きることでできたのですから。彼女は幸せ薄かったもうひとりの双子のことを決して忘れないでしょう。先頃、スミス家ではこの生まれてくることのなかった弟を偲んで、墓石を購入しました。そこにはこう書かれています。

【アンドリュー・ジェイムズ・スミスサラの双子の弟私達の中にあなたは生き続けています】それはサラが中絶を考えているすべての女性に気づいてほしいと思っっている事実を伝えるメッセージです。その事実とは中絶医に真実を伝えてもらえな

かったばかりに、わが子を死に追いやったかもしれないが、その子はあなたの記憶に残り、あなたの心や、これからのあなたの人生の中で生き続けることになるだろうということとです。

フロイド・アレン

変わった考え

私は中絶についてよく知りませんでした。それに。別に中絶をしてもどうしても生めない理由があるなら良いと思っていました。大したことじゃないと考えていたけど、沈黙の叫びのビデオを見て変わりました。まず、中絶の手術の仕方に驚きました。もう痛々しくて見ていられませんでした。赤ちゃんの頭の部分をつぶすとき、何とも言えない気持ちがありました。あれを見ると、胎児は動いて逃げて、私達と同じように生きているんだと実感しました。中絶は人殺しだと思いません。お腹の中から赤ちゃんがいなくなっても、自分の心の中には一生残り続け、後悔するでしょう。

どんな理由があっても、絶対に中絶はしてはいけないのです。生命の大切さ、尊さを実感しました。

「T・U(高三生)」

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 01:00 - 17:30

日のみ 10:30 - 14:00

土曜日 休み

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

現在口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

キリストのすべてを受け入れる

例えば、ある人がミサで「御聖体」を受ける際に、神父様から「キリストの御体」として差し出されるパンを受け取り、そのパンの一片を割いて、神父様に「この一片を神父様が受け取ってください」と差し返せば、それは全然意味のない事である。なぜなら、キリストを受け入れるとは、キリストのすべてを受け入れることだから。キリストのすべてを受け入れるとはすべての人々を受け入れるという事である。例え受け入れ難いと思われる人であってもしっかり、おそらく彼らはちよつと変わっていったり、問題をおこしがちだったり、我々の感情を害するだけなのだ。

或いは、ただ小さいという理由だけでもしれない。現代の社会体制は、胎児を容易に排除する傾向にある。母親が育てられないと判断すれば、他にもつとよい解決法があるかもしれないのに、すぐに中絶されてしまう。自分の子を排除してしまう女性をも、我々はどうか愛せると思う。なぜなら、キリストが彼女のすべてを受け入れ愛しているのだから。なぜ私達は、我々の社会はできないのだろうか？

キリストを受け入れるとは、キリストのすべてのみならず、キリストが愛する人々をも受け入れ愛することである。中絶に賛同すれば、キリストが愛する人を排斥し、ひいてはキリストをも否定することになる！ミサの時ホスタアをちぎって返す行為と同じである。愛し受け入れるとは、口で言うほど簡単で楽しいことばかりではない。真

に隣人を愛そうと思つたら、中絶をなくすために具体的な行動を始めるべきだろう。人間を減らしても問題が減るわけではない。未来の社会の一員を減らして社会がよくなるだろうか。将来、キリストに仕えるはずの人々を殺して、社会を築けるだろうか。中絶にかわる策がきつとある。それは愛である。愛がすべての人間を別け隔てなく受け入れ、育んでくれる。

フランク・バヴォン

中絶のことを知らせよう

私は沈黙の叫びのビデオを見て、とてもショックを受けました。今までの私は、中絶というものがどのように行われるのか、また中絶される時の胎児の状態というのを全く知りませんでした、そのため、中絶というものは毎日たくさん行われているし、それほどしてはいけないなんて思っていました。しかし、今回ビデオを見て、たとえ生まれていなくても、すでに一人の人間である胎児をあんな悲惨な目に合わせるなんて、とても心が痛みました。そして中絶というものは決して行ってはならないものだということが分かりました。現存、妊娠してしまつたら中絶をすればよいと考えている若い女性は数多くいると思います。この女性たちが簡単に中絶を行うことがないように中絶と中絶というものがどんなに恐ろしい事なのかを知らせることが大切ではないかと思いました。

○・M(高三生)